2024年度
マツダ財団寄付講義
（単位互換科目）

広島文教大学
「地域と社会」
報告書

公益財団法人マツダ財団

※以下、講師の敬称略とさせていただきます

目 次

1. 寄付講義開設の経緯 3
1.1 マツダ財団の寄付講義について 3
1.2 開講の経緯 3
1.3 本講義の目標と特色 4
2. 講義の概要 4
2.1 集中講義 4
2.2 ボランティア実習 4
2.3 レポート課題 5
2.4 評価方法 5
2.5 単位 5
2.6 単位認定 5
3. 集中講義の内容 5
3.1 イントロダクション 広島文教大学 副学長 植田 智、マツダ財団 朝野 千明 5
3.2 少年期の心理 比治山大学 現代文化学部 講師 木谷 智子 6
3.3 ボランティア概論 ひろしま市民活動ネットワーク HEART to HEART 事務局長 竹内 瞳 7
3.4 ボランティアを考える NPO 法人 これからの学びネットワーク 代表理事 河野 宏樹 8
3.5 企業の社会貢献活動 マツダ ㈱ 総務部地域リレーション Gr. 工藤 あみ 9
3.6 ボランティアの実際（自然とのふれあい） NPO 法人 ほしはら山のがっこう 副理事長 浦田 愛 9
3.7 ボランティアの実際（子ども食堂） ふかわ子ども食堂 代表 渡邊 恭子 10
3.8 チームワークについて NPO 法人 IMAGINUS 笠井 礼志 11
4. 受講生のレポート課題から 12
①「様々な経験をすることや人と関わりを持つことの大切さ」 12
②「子どもたちに寄り添い、適切なサポートをするには、信頼関係を築くことが必要」 13
③「誰に対しても勇気を出して声をかけ」 13
５．参考 14
（参考１）理解度・内容について 14
（参考 2）ボランティア実習先、実習内容について 15
さいごに 15

1. 寄付講義開設の経緯

1.1 マツダ財団の寄付講義について

マツダ財団の寄付講義は、1995 年に開始しました。社会人として必要な視点・能力の醸成に寄与すべく、実際の社会の仕組みを理解するとともに、現在の日本の課題、世界の課題を社会科学的視点によりとらえ、これから必要とされる「柔らかい社会（社会の不足部分を人と人との支えあいで補う）」での生活者、社会人としての役割やビジョンについて、次世代を担う学生と共に考える「双方向」の講義を目指しています。

1.2 開講の経緯

マツダ財団では、1998 年より、当時の(財)広島市ひと・まちネットワーク（現、（公財）広島市文化財団）と共催で、「感動塾・みちくさ」を開催しています。これは、小学生に創意工夫させ、感動を体験してもらう合宿事業で、このような事業の実施には、プログラムの円滑な推進と子どもたちの活動を手助けするためのボランティアによる支援が欠かせません。加えて、特に大学生などの若い世代において、社会の仕組みを理解し、柔らかい社会を担っていけるような人材を育成したいとの強い思いもあり、本講義「ボランティア活動」が生まれました。そして、2000 年度から「単位互換科目」として広く県内の大学生に受講していただく運びとなりました。その後も、（一社）教育ネットワーク中国のお力添えを賜り、2 年ごとに開講大学を替えながら、現在まで下表のように継続しています。

年度	開講大学	講義名		開講日	単位取得者数
2000-01	広島修道大学	人間科学特論演習 (ボランティア活動)	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2000.5.13&5.20、夏休み実習	13
				2001.5.12&5.19、夏休み実習	19
2002-03	広島国際学院大学	国際協力 (ボランティア活動)	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2002.5.18&5.25、夏休み実習	23
				2003.5.17&5.24、夏休み実習	32
2004-05	比治山大学	世界と共に生きる (ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動を通して)	単位互換科目 高大連携 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2004.5.15&5.22、夏休み実習	27
				2005.5.14&5.21、夏休み実習	9
2006-07	エリザベト音楽大学	人間学Ⅵ-1 (ボランティア活動)	単位互換科目 高大連携 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2006.5.13&5.27、夏休み実習	9
				2007.5.26&6.2、夏休み実習	36
2008-09	広島文教女子大学	国際協力論 (ボランティア活動)	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2008.5.24&5.31、夏休み実習	11
				2009.5.23&5.30、夏休み実習	11
2010-11	県立広島大学	35 ボランティア活動	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2010.5.22&5.29、夏休み実習	20
				2011.5.21&5.28、夏休み実習	30
2012-13	広島女学院大学	特別講義Ⅰa 「ボランティア活動論」/ 「ボランティア論Ⅰ」	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2012.5.19&5.26、夏休み実習	3
				2013.5.18&6.1、夏休み実習	30
2014-15	安田女子大学	現代社会と人間 B （ボランティア活動）	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2014.5.24＆31、夏休み実習	7
				2015.5.23＆30、夏休み実習	14
2016-17	広島修道大学	キャリア形成特殊講義 （ボランティア活動）	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2016.5.21＆28、夏休み実習	19
				2017.5.20＆27、夏休み実習	20
2018-19	広島女学院大学	「ライフキャリア特別講義Ⅰa」 「ボランティア活動」	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2018.5.19&26、夏休み実習	36
				2019.5.18＆25、夏休み実習	38
2020-22	広島市立大学	「地域ボランティア活動」	単位互換科目 ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習	2020 年度はコロナで中止	-
				2021.5.22&29 ｵﾝﾗｲﾝ授業　実習	11
				2022.5.21&28、 実習	17
2023-24	**広島文教大学**	**「地域と社会」**	**単位互換科目** **ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ実習**	2023.5.27＆6.3、 実習	14
				2024.5.18 ＆ 25、 実習	3
				単位取得者数累計	**452**

1.3 本講義の目標と特色

本講義は、集中講義とボランティア実習を組み合わせた構成としています。まず、集中講義でボランティア活動に必要な基本的知識や方法を学び、その後、実際にボランティア活動を実践することで、活きた知識・方法を身に着け、自ら感動を体験してもらいたいと考えています。

【受講目標】

- ボランティアの基本的な理念を理解する
- ボランティア活動を行う上で必要な態度とルールを理解する
- 対人コミュニケーションを図る（相手の話・気持ちを聞き、自分の気持ちを伝える方法を学ぶ）
- ボランティア活動を実際に体験する
- ボランティア活動を通じて自らの生き方を見つめ直す（これからの生き方を考える）
- 報告書の書き方、報告の仕方を学ぶ。

【特色】

- 多様な外部講師陣のリレーによる講義
- 子どもたちと接するボランティアの実習
- 自力での実習先探索、交渉、参加

2. 講義の概要

2.1 集中講義

日時　：　2024年5月18日(土)、5月25日(土)、9：10～16：20　（4コマ×2日間）

場所　：　広島文教大学

講義構成と講師陣　：

（敬称略）

内　容		講　師
1．イントロダクション	2024 5.18	広島文教大学 副学長 植田智、 マツダ財団 常務理事 朝野千明
2．少年期の心理		比治山大学現代文化学部 講師 木谷智子
3．ボランティア概論		ひろしま市民活動ネットワーク HEART to HEART 事務局長 竹内瞳
4．ボランティアを考える		NPO 法人これからの学びネットワーク 代表理事 河野宏樹
5．企業の社会貢献活動	2024. 5.25	マツダ ㈱ 総務部地域リレーション Gr. 工藤あみ
6．ボランティアの実際		NPO 法人 ほしはら山のがっこう 副理事長 浦田愛
7．ボランティアの実際		ふかわ子ども食堂 代表 渡邊恭子
8．チームワークについて		NPO 法人 IMAGINUS 笠井 礼志

2.2 ボランティア実習

各自でボランティア実習先を探し、夏休みなどを利用して実施

実習の条件

- 期間は 5/26～8/31 の間。
- 実働 30 時間以上、あるいは 2 泊 3 日以上であること。
- 小・中学生とのふれあいのあるボランティア活動。

2.3 レポート課題

「集中講義」と、その後に行った実際の「ボランティア活動」経験より、あなたが得たこと感じたこと、またこれらを踏まえて、「これからの生き方」についてあなたの思いを記述下さい。

事前に実習先連絡票を提出した上で、2024 年 9 月 4 日までに、レポート（履修報告書）、アンケートと、ボランティア参加「証明書」を提出。

2.4 評価方法

「講義の出席」、「ボランティア活動への参画」、「レポート」 の 3 点により下記の基準で評価。

- 本講義は、ボランティア実践活動による履修学生の精神的な「気づき」を大切にしたいと考える。従って、評価点の配分を集中講義４０点、ボランティア活動６０点と定める。
- 集中講義に１日も出席しない、あるいは、ボランティア活動の実践を行わない場合は、いずれも単位は認定しない。
- 集中講義２日を、それぞれ２０点（１コマ５点）とする。
- 実践活動は証明書のあるものだけを単位認定対象とする。
- 基本的に絶対評価で行う。但し、実施レポートの内容は相対的な評価も加味する。

2.5 単位

2 単位

2.6 単位認定

広島文教大学　履修登録 8 名、 内集中講義受講 5 名、 内 3 名が単位取得

3. 集中講義の内容

3.1 イントロダクション　　広島文教大学　副学長　植田　智　・　マツダ財団　朝野　千明

初めに、広島文教大学副学長である植田智教授より開講のご挨拶を頂いたのち、マツダ財団が「イントロダクション」を行った。

イントロダクションでは、受講者全員の自己紹介に続き、本講義の成り立ち、目的や達成目標を述べた上で、２日間の集中講義と実習、単位認定までの日程と提出資料について説明した。

続いて、当講義の提供者であるマツダ財団について、科学技術の振興と青少年の健全育成を２本柱として行っている事業内容について紹介した後、ボランティア実習に備え、過去の受講者の実習先等を紹介し、ボランティアに対するイメージを持ってもらうよう努めた。

最後には実習時に事故や体調不良が発生した場合、大学事務とマツダ財団に連絡するように念押しを行った。

【受講生の感想】

＊　ボランティア活動に対して感じていた不安が和らぎ、目標としていきたいことが明確になってきました。社会人となっていく段階で、ボランティアを通して実践し、”具体的事例”を自分の中で身に付け、深めていきたいと思った。

＊　私は、今まで自分のことをボランティア経験が多い学生だと思っていたが、基本理念やボランティアの意義をあまり深く理解していなかった。今後、講義の中で、ボランティアについて学び、実践に取り入れたい。

＊　イントロダクションということで、講義構成や目的、マツダ財団の事業について知ることが出来たのでよかったです。7 月 28 日にある吉野先生の講演会にも行きたいと思いました。この授業を通して、自分の知らない世界にたくさん足を踏み込み、視野を広げることは見識を持った人になる為にも重要だと思ったので、いろんなことに挑戦していこうと思いました。

3.2 少年期の心理　　比治山大学 現代文化学部 講師 木谷 智子

青年期のアイデンティティ形成の研究をされている比治山大学の木谷智子先生に講義いただいた。

「見る人によって色が違って見えるドレス」を例に見る場の環境や個人の特性によってより同じものを見ても感じ方が異なることを題材として「人の気持ちを理解することは、相手の世界の見方を理解するということ」であるという点を学んだ。特に子どもは認知機能の発達段階にあり、自分中心的な見方から徐々に客観的な見方ができるようになることを理解した。

その後、*FELOR モデルと傾聴スキル技法を学び、ペアワークを何度か体験した。相手の話を聞かない姿勢（顔をそむける、目を見ない、腕を組む）と話を聞く姿勢（顔を向ける、目を見る、手は膝の上）の両方を話し手、聞き手として体験し、話す側、聞く側双方の感じ方を話し合った。また、うなずき、相槌、反復技法など、当たり前のことがいかに有効であるかを体験した。

心理学部の受講者には、相手の話を聞かない姿勢をシミュレーションする中でも思わずうなずいてしまうことがあり、日常の癖は良いものも含めて抜けないものだと感じた。

*FELOR モデルとは、

Face：顔を相手に向けて話を聞く
Eye-contact：相手の目線を優しく見守る
Lean：身体を相手の方に傾ける
Open：閉ざされた姿勢ではなく、開かれた姿勢で
Relax：落ち着いてリラックスした気持ちで

【受講生の感想】

＊　相手のことを知る為に必要な傾聴スキルというものを初めて学ぶことができた。今まで知っていた方法もあれば、初めて聞く方法もあり、とても面白かった。相手と楽しく会話をして、信頼してもらえるような会話を意識したい。

＊　違う方向を向いていたり一切あいづちをうたなかったりなど、態度が悪い聞き手の人にあたることがあまりなかったので、あえて態度が悪いバージョンでも会話をしてみるというのは新鮮でした。時間の進み具合や話しやすさなどが全然違ったので、聞き手の態度が話し手に与える影響は大きいと改めて感じました。

＊　授業で学んだりしていた「うなずきや相槌が大切」というのを体験して学べたことで、より意識していこうと思った。私が、話を聞きながら質問をすることに苦手意識を持っていたけど、話している段階で共通することはあるかを知ろうとすることも、大切な姿勢だと感じた。

＊　少年期の心理ということでしたが、聞く姿勢や相手の気持ちを察する能力や力を養うことは人と関わる上で

本当に重要だと思いました。目を見て話しを聞いたり相づちを取ることで話し手はとても安心することが今日のペアワークを通じて気付いたので普段から人と話す時や先生が話す時は意識して目を見て話しを聞いてうなづきもしていきたいと思いました。

3.3 ボランティア概論　　ひろしま市民活動ネットワーク HEART to HEART 事務局長 竹内 瞳

永年市民活動支援に携わられている、ひろしま市民活動ネットワーク HEART to HEART 事務局長の竹内瞳さんに講義いただいた。HEART to HEART は、広島を拠点に活動する市民団体のネットワークづくりを目指しており、平和、環境、地域づくり、国際交流など幅広い団体の支援をしている。

他己紹介の後、日本におけるボランティア活動の変遷からボランティアの基本原則を解説いただいた。基本原則「自発性」「無償性」「先駆性」「公共性」はボランティア活動全般が該当し、そのうち継続的な活動を行うために一定の経営資源を保有する NPO(特定非営利活動)法人があることを学んだ。ボランティア経験がある受講者の中にも体系的にボランティア活動について聞いたことはないとの話もあった。

集中講義の後、受講者にはボランティア実習が求められている。ボランティア活動先を探すにあたり「自分の関心」や「できること・得意なこと」などのポイントを紹介された。

最後に、これから頑張る皆さんに対し、ボランティアを行うのは責任が伴うこと、活動の先には当事者がおり、何のために活動するのか意識すること、「人のため」に活動することが、実は自分のためになることを伝えられた。

【受講生の感想】

＊ NPO という名称はよく聞くが、全く理解していなかった為、どういう活動をしているのか、なりたちなど興味深い話をたくさん聞くことができた。NPO 法人開催のボランティア活動にも参加してみたい。

＊ ボランティアもいろんな種類のものがあると分かりました。いきいきカフェをやられていた時に、コーヒーが人と人とをつなぐと言われていてなるほどと思いました。人とコミュニケーションを取るときも、何か自分と相手をつなぐものがあれば距離を縮めやすそうだと思ったので、その何かを見つけられるようになりたいです。

＊ 昨年障がい者と関わるボランティアに参加したことがあり、楽しいと思う活動が多かった。今回お話を聞き、様々なボランティアで私が知っていること、これから学んでいきたいことでもボランティア活動に参加していると知り、障害者の方とお話したり、成長していける学びをしていきたいと思った。

＊ 私は、野外活動センターなどで、子供と関わるボランティア活動をよくしたので楽しい経験が多かったですが、今日のお話を聞いて、災害活動なども機会があれば参加したいと思いました。本当に困っている人に対して援助をするその経験は、より今後のボランティア活動や自分自身に活きていくのだと思いました。

3.4 ボランティアを考える　　NPO 法人　これからの学びネットワーク 代表理事 河野　宏樹

「放課後児童クラブ」を運営されている「NPO 法人　これからの学びネットワーク」代表理事の河野宏樹さんに講義をしていただいた。

“これからの学びネットワーク”は、様々な世代の人たちが、自ら考え、仲間と協働し、実行に移すことができるよう“参加体験型”の学びを大切にした、“人づくり”のプログラムを企画運営されている。

演台を降り、文字通り受講者目線で一人一人に語りかける形での講義となり、受講者にとっては主体的に関わりやすい雰囲気を感じた。無償性を原則とするボランティアにとっての報酬とは何なのか？　活動に際しての不安は？　といったことをお互いに語ることで自己開示と理解を深める時間は貴重な体験だと感じた。ボランティア活動の原則や、ボランティア 10 ヶ条として注意すべき点を伝えるだけでなく、これまでの自身がいた世界とは別の世界に行くことで自分の中で安心・安全の域が拡大し成長する、そのきっかけがボランティア活動にあると説かれた。

ボランティア実習に向かう不安を払拭する内容だと感じた。

【受講生の感想】

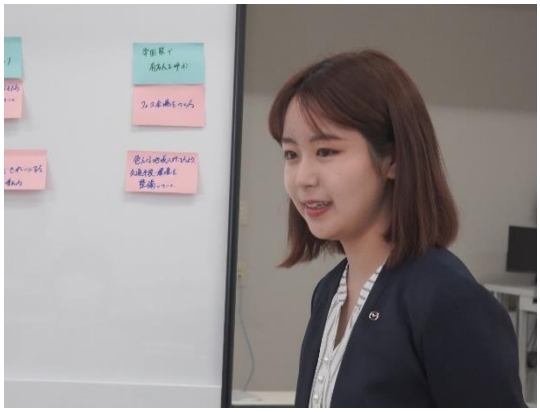
＊　ボランティアについて、社会の中での立ち位置や報酬、大切なことについて、話し合いの中でしっかりと学ぶことができた。実習に向けて具体的な計画を立て始めようと考えた。

＊　ボランティア 10 ヶ条はどれも大切なことだと思いますが、予定を立てて時間を作っていただいているので約束は必ず守るということ、また 1 人 1 人性格やバックグラウンドも異なるという前提で相手の立場に立って考える、活動の秘密を守ることは最低限守りたいと思います。そして何か学びも得られるように、目的を持って参加したいです。

＊　これまで参加したボランティア活動を振り返ることができ、自分の経験をまとめて伝えることが難しいと感じた。夏休みの間で参加するボランティアには自分から積極的に対話し、考えを深められる学びをしていくことを課題とした。これからの経験は自分で振り返りながら成長や学びにつなげていきたいと思った。

＊　今日のお話の中でボランティアをする中で何が一番大切なのか、その経験が自分にどう活きるか、悩みや不安をグループで考え発言することで、講師の先生から解決策やお話を聞けたり、他の人の意見を聞き考えを深めることが出来たのでよかったです。4 回の授業を通して講師の先生のお話に共感することや興味深いと感じることが多々あり、この講義をとって本当に良かったと思いました。

3.5　企業 の社会貢献活動　　マツダ ㈱ 総務部地域リレーション Gr.　工藤　あみ



マツダグループ全体の社会貢献活動および地域貢献活動のとりまとめを行っているマツダ㈱総務部地域リレーション Gr.の工藤さんに、企業と社会の関わりについて説明をいただいた。

マツダ㈱の概要紹介後、VUCA の時代と言われる中、社会課題解決に向けた取り組みが求められている現状を、マツダを例にとって紹介された。マツダ㈱は「環境・安全」「人材育成」「地域貢献」を柱に、森林保全活動や学校教育支援、フードドライブなどに取り組んでいる様子が紹介される中、人材育成で取り組まれている学習支援活動について、考え方や取り組み事例が紹介された。集中講義後に小学生などを対象としたボランティア活動を控えている学生の参考になると感じた。

グループワークでは、「企業が行う社会貢献」について思い浮かぶ企業名と活動について話し合った他、認知度を上げるための方法につてグループディスカッションを行った。学生は講義やグループワークを通して身近な企業がなぜ社会貢献活動を行っているのか理解を深める機会となったようだ。

【受講生の感想】

＊　非財務領域に関して、どういった対応をとるかが重要であると思った。プログラミング教室やオンライン授業など人材育成、学校教育支援の活動もしていて、次の世代のことについても考えられていると感じた。

＊　現代の社会課題から地域活動貢献を考えることができた。これからの就職活動やボランティア・社会人になってからでも”VUCA の時代”様々な事に自分で考えて行動する・対応していくことを大切にしていきたいと思った。

3.6　ボランティアの実際（自然とのふれあい）　NPO 法人　ほしはら山のがっこう　副理事長　浦田　愛

ほしはら山のがっこうの副理事長・事務局長・ふるさと自然体験塾長の浦田愛さんに講義を頂いた。ほしはら山のがっこうは三次市の廃校になった小学校を改装した体験交流宿泊施設で、人と人とのふれあいの場を大切にしながら、総合的な「生きる力」につながる「自然体験・ふるさと体験」による遊びと学びの機会・場を提供している。

田舎には街明かりがないことと引き換えに満天の星空があり、「ないものねだり」から「あるものさがし」という考えを提示された。

また、三次の”ほしはらの森”とオンラインでつなぎ、映像を見ながら説明を受け臨場感あふれる講義となった。現地の映像と質疑応答はオンラインの真骨頂であって、コロナ禍前には殆ど見られなかったコミュニケーション手法を取り入れられていることに、ボランティアとしての先駆性を感じた。

自然とふれあうことによる「感性から人間教育」については、教育学部の学生にとっても心理学を学ぶ受講者にとっても心に響いたようだ。

【受講生の感想】

＊ 子供の危険やけがの対処も大切だが、危険を少なくするだけでなく、あえて危険な環境で活動することによって、危険を知ることができる。

＊ 森や便利な環境にはない生活を直接体験することで、からだと心で学びを得られる経験がとても大切なことだと感じた。消費者であることはお金を投票権としている生活であるという考え方を教えていただけて今後身に付けていきたいと思った。

3.7 ボランティアの実際（こども食堂）　　ふかわ子ども食堂　代表　渡邊　恭子

子ども食堂を運営されている"ふかわ子ども食堂"代表の渡邊恭子さんに講義いただいた。子ども食堂は、その成り立ちから経済的困難を抱えた子どものための施設・仕組みといった認識をされることがあるが、現在では「子どもを真ん中においた多世代交流の地域の居場所」といった役割を担っていて、その運営にとって官民連携、地域全体での認知、運営代表の負担軽減が不可欠であることを知った。

続いて、ふかわ子ども食堂の具体的な取り組みが紹介された。学生ボランティアの役割は、食事の準備に留まらず子どもたちと遊んだり、イベントの企画、参加など多岐にわたることが紹介され、これは学生の関心を集めた。

更には空き家を使ってのイベントである「子ども食堂夏祭り」で、ボランティアとして何ができるかを発想・発表するグループワークを行った。来場者に浴衣を着付け、写真撮影をするなど、ユニークかつ実現性の高いアイデアが次々と出され、学生のこれまでの子ども食堂に対するイメージが大きく変わっていることが感じられた。

【受講生の感想】

＊ 子ども食堂について、全く知らなかった為、とても勉強になった。また、自分で企画することが今までなかった為、企画の難しさや楽しさがよく理解できた。

＊ 子ども食堂では、ご飯だけでなく一緒に人形を作ったり飾り付けを行ったりいろんな活動をしているのだと分かりました。各季節ごとにイベントにそくした活動を行うのも楽しそうだと思いました。夏祭りに何をするかの企画作りでは浴衣を着て写真撮影という案が出ましたが、実際に浴衣作りを取り入れても楽しそうだと思いました。

＊ 子ども食堂について、知らないことが多かったなと思った。様々なボランティアで地域との関りが大切にされていると感じた。自分たちで実際に何をどう取り組んでいくかを考えられて、他にも経験したいと思った。ボランティアの意義を考えることで、改めて何を目的に体験していきたいかを考えることができた。

＊ 子供食堂は 2012 年に初めて出来たことを知り驚きました。もっと古くからあるのかと考えていました。数も年々増加している事を知り、今社会に求めているのだと思いました。元々子供食堂はお金がない人が行くイメージだと思っていました。みんな食堂という名前は誰でも気軽に利用できるのでとても良い名前だと思いました。SNS の普及にともない、人との関りは希薄になっていますが、その中でみんな食堂は人とのつながりという点で社会に求められている事だと思いました。

3.8 チームワークについて　　NPO 法人 IMAGINUS 笠井 礼志

NPO 法人 IMAGINUS の笠井礼志さんに「チームワークについて」講義いただいた。笠井さんは災害支援活動、高校生が夢を叶えたり社会課題解決したりするための支援や塾の講師など多彩に活躍されている。
アイスブレイクとしてチームで何かをやる面白さを体感しつつも、その内容から「チームとは何か」という設問につなぐ手法は、自然に進められていく。
講師から、チームとは「共通の目標を持ってそれの達成に向け、協力して行動している組織」であることに加え「自分の幸せ追及とチームの目標が重なっている点が大事」であること、また、「個人の好きなことや得意なことを組みあわせ最大化する装置」であること等の説明を受けた。

講義後半、「どうすればより良いチームを作れるか」「どのようにしてメンバーが同じ目標に向かって行動できるようになるか」を理解するため、各グループ A4 コピー用紙 30 枚を使って、できるだけ高いペーパータワーづくりに取り組んだ。より良いチーム形成のためには「共有ビジョンを持つこと」「心理的安全性の確保」に加えて、「その人の個性を生かす」ことにより高い成果が出せることなどのポイントについて説かれた。

【受講生の感想】

＊ チームの中での上手なコミュニケーションであったり、チームを良い組織にする為のコツや心がけを学ぶことができた。今までなんとなくやってきたものにもそれぞれ大切なことがあることがわかった。

＊ チームとグループの違いについて考える機会がありませんでしたが、良く考えてみると微妙に違うニュアンスの言葉だと思いました。ボランティアをする上でも生活をしていく上でもチームワークは大切だと思うので、心理的安全性が築いていけるようなお互い高めあって成長できるようなチームにできるように意識したいと思います。

＊ バイト先で心理的安全性を築いていけるよう指摘してもらったことに対して、反省と感謝を伝えていけるようにしようと思った。チームワークをすることで、お互いに関係が深いわけではなかったけど、「こうしていこう」と考え、共有していけることが大切だと感じた。

＊ ペーパータワーというゲームを初めて知りましたが、やってみてとても楽しかったです。今後ボランティア活動や将来教員になった時、やってみたいと思いました。また心理的安全について学ぶことが出来ました。最近実感していますが、ミスや失敗は捉え方によって良くも悪くも良くも悪くも変化するのだなと感じました。失敗を学びとり自己成長などポジティブに考える事は人生で大切な事だと思いました。

４．受講生のレポート課題から

ボランティア実習の終了後に提出されたレポート 3 件を紹介する（内容の把握しやすさのために事務局側で、文中のフレーズを使ってタイトルを付け、印象的な部分に下線を付した）。

これらのレポートからは、受講生一人ひとりが、初めての実習先で戸惑いながらも、子供たちと真剣に向き合い成長していく姿が伝わってくる。この講義を開催して良かったと思える瞬間である。

なお、受講生の新鮮な感性を尊重するために、長文の場合も抜粋や省略等せず、全て原文をそのまま転載した。

① 「様々な経験をすることや人と関わりを持つことの大切さ」

実習先：「感動塾・みちくさ」（公益財団法人 広島市文化財団 公益財団法人 マツダ財団）、
風に係わる実験や工作、自然体験などを通して、風のふしぎについて学ぶ

広島文教大学 人間科学部 ３年 Ｆさん

集中講義やボランティア活動を通して，「誰を支えるための行動なのか」「自分はどのような役割で何ができるのか」を考えることが必要であると感じた。また，ボランティアをする側のコミュニケーションや支え合いがとても大切であると感じた。

集中講義では，「自分のできることは何かを考え，相手が必要としていることを行うことが大切」である。また，「人と人とのつながりがとても大切にされている」という学びを得た。例えば，何を学び，どう成長したのかを伝えられる事例がボランティアで得られることや，それらの経験から自分がどのように他者や世界を捉えるのか。いずれ自分の成長に繋がる人のための行動は，自分のできることから始め，自発的に取り組むことが必要であり，一人ではできないことであるなどである。これらも大切なことであり，お話や自分の経験から学んだ物事であると感じている。これまでのボランティア活動では，障がい者の方と関わり，コミュニケーションが大切であることや自分ができること，するべき行動が比較的考えやすい環境であったと感じた。

しかし，今回の感動塾・みちくさで小学生と関わるボランティアに参加させていただいたことから，自分に何ができるのか・するべきなのかは，未経験のことをしながら考えることは難しいと感じた。また，目的が活動と一致していることが大切であると感じた。初めて小学生と関わるボランティアに参加し，元々の性格に加え不安や緊張から自分から小学生に話しかけることが難しいと感じた。「風」についての学びを支援する役割であったが，宿泊や施設で一緒に生活する上でのコミュニケーションがとても重要であった。今回，私がこのボランティアに参加した理由は，これまで経験したことのなかったボランティアに参加し，関わったことのなかった方々と一緒に過ごすことで自分の考え方を広げたかったからである。この目的は達成できたが，小学生と生活を共にする上で，もっとできたな・するべきだったなという反省点があり，新しい目標となった。大学生同士や職員の方々は声をかけあったりいろんな話をしたり，支え合いやすい環境をつくってもらい，チームワークを成り立たせる上で必要なことを学べたと感じられた。

これまで経験したことからいろいろなことを考えてきたと思っていたが，今回の活動から様々な経験をすることや人と関わりを持つことの大切さを改めて学ぶことができた。ボランティアは自発性が基本原則であるが，自分で選ぶ活動には偏りが出てくると考える。そのため，これからは活動している人同士の関係をより大切に，自分の範囲を広げていきたいと考えた。また新しい経験だけでなく，したことのあるボランティアでも何を目的としているのか，他に必要なことはどんなことであるかを考えた上で取り組みに参加していこうと考えた。今回未経験のボランティアに参加したことで得られたこと，今後大切にしたいことができたので，また三滝での活動に参加させていただいたり，ボランティア以外にも挑戦したりしていこうと考える。

② 「子どもたちに寄り添い、適切なサポートをするには、信頼関係を築くことが必要」

実習先：「放課後等デイサービス　桃源郷　ごりちゃんのおうち」（有限会社　テラヤマ）

広島文教大学　教育学部　４年　　Ｏさん

集中講義と放課後デイサービスでのボランティア活動を通して、さまざまな経験と学びがあった。

まず、子どもたちと直接関わることで、子どもたちが抱えるそれぞれの課題や悩みに対する理解が深まった。特に、学習面だけではなく、友人関係や家庭環境が子どもたちに強い影響を与えることに気付くことができた。私が実際経験したものとして、このようなものがあった。母親が病気によって入院しており、家庭で甘えることができていない兄妹がいた。その兄妹は放課後デイサービスにて、私にすごく甘えてきており、抱っこやおんぶなどを迫ってくることも多々あった。しかし、他のスタッフに元々はそこまで甘える性格ではなかったと聞き、家庭で甘えることができていない分、近くの大人に甘えてしまうのかと驚き、その様子を間近で学ぶことができた。

次に、コミュニケーションの重要性を強く感じた。放課後デイサービスは、軽度の発達障害を持った子どもたちがほとんどだった。その子どもたちは自分の考えや感情をうまく表現できないことが多く、その子どもたちに寄り添い、適切なサポートをするには、信頼関係を築くことが必要だと学ぶことができた。勉強を優しく教え、一緒にさまざまな遊びをし、ご飯を一緒に食べて、ゆっくりと信頼関係を気づくことで、子どもたちも心を開き、自分の考えや意見を頑張って表現してくれるようになった。

これらの経験を踏まえ、これからの生き方について、私は「他者の立場に立って考えること」だと考える。私は、来年から教育者として、山口県の教員となる。そこで、ただ知識を教えるだけでなく、生徒一人ひとりの背景や個性を理解することで、適切なサポートを提供することができると考えた。現在、私の目標は、子どもたちが自分の可能性を最大限に発揮できる環境を提供することだ。放課後デイサービスのボランティア活動は終了したが、代表者の方がそのままここでアルバイトとして雇いたいと言ってくださり、現在もその放課後デイサービスで働いている。そこで、引き続き自分自身を磨き、他者を理解する力を養っていきたいと思っている。

③ 「誰に対しても勇気を出して声をかけ」

実習先：「やってみようはじめてのキャンプボランティア」（公益財団法人広島市文化財団）

広島文教大学　教育学部　２年　　Ｔさん

７月６日から７月７日に１泊２日で、小学３年生から６年生 28 名と 14 名の大学生ボランティアスタッフと三滝少年自然の家でサマーキャンプに参加しました。サマーキャンプでは、アイスブレイク、館内散策、キャンプファイヤー、野外炊飯をしました。

２日間を通して、子供たちに対する接し方について、実践を通して学ぶことが出来ました。小学生を相手にどのように説明をすればよいのか、また、どのように接すればグループの雰囲気が良くなるのかということを活動の中でたくさん考えました。班の子供たち同士で交流を深める為に、主導して勝ち抜きのじゃんけんをしたり、しりとりゲームをしました。また、班に１つの館内散策のクイズでは、１人で進めるのではなくみんなで協力して活動に取り組めるように、クイズの問題を声に出して言おうと声かけをしたり、みんなで協力しようと声かけをしました。臨機応変に行動する力ととっさの対応力が身についたと思います。

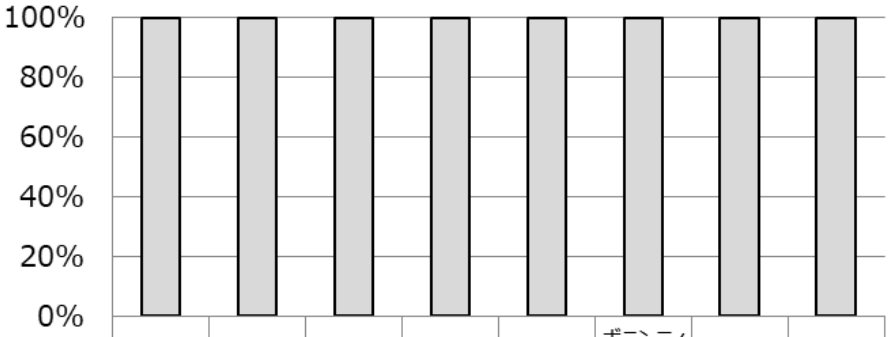
サマーキャンプでの活動を通して、自分から真剣に向き合えば、子供たちも応えてくれることを知りました。また、子供たちだけではなく、同年代の大学生たちとも仲良くなれたことから、誰に対しても勇気を持って話してみることが重要だということを学ぶことが出来ました。これから新たな人との出会いがたくさんあります。人と関わることは生涯避けることはできません。人に対して心の壁を作るのではなく、誰に対しても勇気を出して声をかけて積極的にコミュニケーションを取り、誰とでも仲良くなれる人になりたいと思います。同様に、誰でも相手の存在を尊重して受け入れていきたいと思いました。

５．参考

（参考１）理解度・内容について

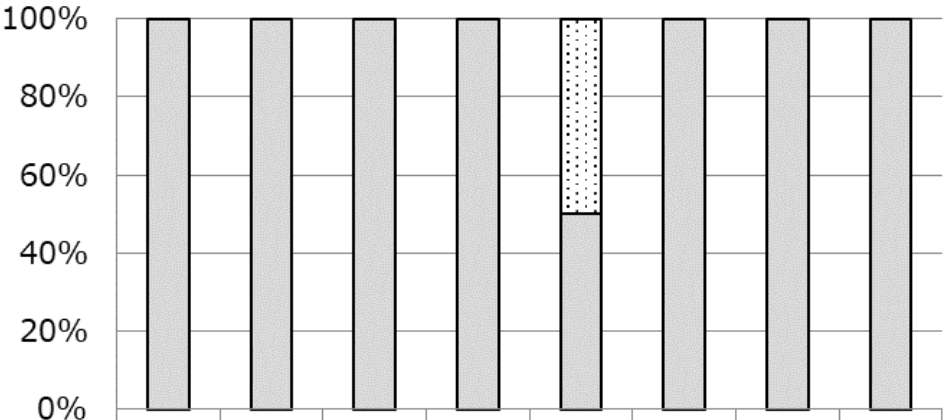
集中講義の際に、各講義に対する感想と、理解度・内容について、受講生にアンケートを実施した。

【理解度】 サンプル数が少なく、自己申告ではあるものの、受講者全員に概ね理解いただいた。



	イントロダクション	少年期の心理	ボランティア概論	ボランティアを考える	企業の社会貢献	ボランティアの実際(自然とのふれあい)	ボランティアの実際(こども食堂)	チームワーク
■難解	0	0	0	0	0	0	0	0
□普通	0	0	0	0	0	0	0	0
□良く解った	4	4	4	4	2	2	4	4

【内容】 サンプル数が少ないものの、内容については、概ね「良い」との評価をいただいた。



	イントロダクション	少年期の心理	ボランティア概論	ボランティアを考える	企業の社会貢献	ボランティアの実際	ボランティアの実際	
■悪い	0	0	0	0	0	0	0	0
□普通	0	0	0	0	1	0	0	0
□良い	4	4	4	4	1	2	4	4

(参考２） ボランティア実習先、実習内容について

ボランティア実習は、通常通り「小・中学生とのふれあいのあるボランティア活動」を基本としました。

「感動塾・みちくさ」（公益財団法人広島市文化財団　公益財団法人マツダ財団）（2 名）
放課後等デイサービス　桃源郷　ごりちゃんのおうち（有限会社　テラヤマ）（1 名）
「やってみようはじめてのキャンプボランティア」　（公益財団法人広島市文化財団）（1 名）
その他、「学童 n1」（学童 n1）

さいごに

講師の皆様には、集中講義からボランティア実習の相談・受け入れに至るまで、調整とご指導をいただき誠にありがとうございました。お蔭様で無事終了することができました。

広島文教大学でご担当いただきました植田副学長や学生サポート課の西沖様には、学生の立場に立った柔軟なご支援を賜り誠にありがとうございました。

以上

発行：2024 年 10 月
公益財団法人マツダ財団
広島県安芸郡府中町新地 3-1
事務局長代理　　朝野　千明